

**第8回エコエリアやまがた推進コンクール  
優秀賞（エコエリアやまがた推進協議会長賞）**  
※掲載している情報は平成25年度時点のものです。

名 称	おきたま自然農業研究会
所在地	米沢市

**1. 取組の背景・経過等**

個人や数名のグループで有機農業に取り組んでいた農業者9人が集まり、2002年3月に本来あるべき「農業」と「食べ方」・「暮らし方」を考え、これまでの取組みを点から面へ広げることを目的におきたま自然農業研究会を設立した。

研究会では規約に以下の理念を掲げて活動を行っている。

現在、会員10名、総作付面積が約70ha、内有機栽培圃場約20ha（うち有機JAS18ha）、特別栽培圃場約25ha、作目は水稻50ha、大豆15ha、枝豆2ha、なたね・そば1ha、小麦40aなどである。

グループとしての販売は有機・特裁の米が約1,000俵で、個人の販路・農産物・加工品販売とマッチングさせて活動している。



**【おきたま自然農業研究会規約より】**

- ① 環境破壊を伴わず無公害で土壌と作物の潜在能力を発揮できる環境を整え、生命力ある味の良い農産物の生産を目指す
- ② 食生活をはじめ生活全般、人と人、人と自然のつながりにおいても、あらゆる生命が永続的に共生できる環境と社会を創っていく
- ③ 農村と都市の食卓の同一化をめざし、自給を基礎にスローフード・スローライフを楽しむ
- ④ 単なる商品の売買ではなく、人と人の有機的人間関係を構築する
- ⑤ 生産者と消費者の合意に基づき、計画的に生産する。また、生産者と消費者の相互信頼のために価格も決定する

**2. 農業経営・技術と取組姿勢**

**(1) 化学肥料・農薬に頼らない有機農業技術の実践と工夫**

土づくりと効果的効率的な水田抑草を重点に以下の取組みを行っている。

- ・微生物と土壌の親和性を考慮し、土着微生物と圃場の土を活用したボカシ肥料づくり
- ・合鴨水稲同時作での工夫（スプレッターと軽量ネットの使用、黒テグスの活用などでネット設置等の労力の低減、1ha/1日/1人）
- ・除草機の改良、イネミズゾウムシ侵入防止のための畦波シートの設置
- ・早期湛水、2交代掻きによる雑草の確実な芽出しを行い雑草抑制、活着期間を十分確保して除草機使用。（除草機の労力は最短事例 2時間/10aに低減）
- ・米糠、オカラペレットを活用して除草機の仕上がり向上を実現
- ・紙マルチの使用（田植え面積約2ha）
- ・需要がある秘伝豆やアレルギー・アトピーなどにも効果があると言われているササニシキ、どまんなか、黒米等の品種の導入

(2)資源循環(家畜排せつ物、稲わら、食品残さ等)及び地域資源の活用の実践  
土づくりと抑草につながる資源循環を目指して以下の取組みを行っている。

- ・堆肥(地元肥育農家より)、オカラ(地元豆腐店より)、米糠(自家精米より)、くず大豆(大豆作付会員より)の活用で地力増進、抑草資材製造
- ・自家製ボカシ製造(5人で約2トン)
- ・米糠・オカラの委託製造(約500Kg)

(3)温室効果ガスの排出の抑制、自然エネルギーの活用、生物多様性の保全等への取組の実践と工夫

栽培技術と調和した環境対策を意識して以下の取組みを行っている。

- ・化学肥料不使用面積の拡大 20ha(2003年)から30ha(現在)へ拡大
- ・稲わら分解促進のため良質堆肥施肥
- ・ボカシ肥料を使った健全な土づくり(硫化水素の抑制)
- ・不耕起・半不耕起
- ・米糠の活用でイトミミズ棲息環境整備、藻類などの繁茂の促進
- ・冬期湛水の実施(約5ha)



以上の取組みを行いながら「生きもの示標」で生物多様性の成果を数値で確認している。

- ・田んぼいきもの調査の実施(2008年より実施)  
(共催団体:米沢市立塩井小学校、和堰切通堰地域保全会、JA山形おきたま青年部、米沢地域有機農業推進協議会、生物多様性農業支援センター、消費者、取引米穀業者)

(4)飼料自給率の向上の実践

(5)持続的な有機農業の実践と経営確立

研究会では、技術交流、資材の共同購入、販路開拓などにより、有機農業を中心とした環境保全型農業の普及と拡大に取り組んできた。

技術交流では、主に水田の除草・抑草対策と食味向上を目指して、各種研修会への参加や連携機関の協力のもと先進的な農法や情報を収集し、これまで培ってきた個々の会員の実践技術を含め、相互交流・研究を進めながら、日々研鑽することで技術力の向上に取り組んでいる。

また、肥料に関する情報交換や共同購入、米糠ペレットの共同委託製造、資材の共同購入も積極的に進め、生産コストの縮減による所得の確保に取り組んでいる。

一定の規模を継続できる技術の確立と作目の拡大を目指した取組成果は以下のとおり。

(構成農家10戸における2003年と2013年の比較)

- ・有機栽培:約16haから20haへ拡大、米の平均単収:440kgから480Kg/10aへ増加
- ・有機稲作と慣行栽培比  
掛増経費:18,000円から13,000円/10aへ低減、除草労力:7時間から5時間/10aに低減
- ・有機米の最低販売価格 25,000円~26,000円/俵(個人保管でコスト削減)
- ・有機栽培の大豆や小麦の加工を委託して、味噌や醤油を販売
- ・畦畔で除草剤不使用、ビオトープの設置

## (6)新たな知見(先進的な農法等)と情報の収集(農業者間の交流、研究活動等)

有機農業の様々な技術の中から自らに適した技術の導入の模索、全国の先進事例の研修、行政との連携や販売についての情報交換を行っている。

### ○各種研修会への参加

- ・民間稲作研究所(有機稲作技術研修会で早期湛水2回代掻きや稲麦大豆2年3作の研修)
- ・MOA自然農法文化事業団(2山耕起による抑草の研修)
- ・日本自然農業協会(土着微生物の活用、酵素の活用、栄養週期の研修) など
- ・大地を守る会(原発事故による販売不振への対応の情報交換)
- ・農をかえたい全国運動・東北有機農業推進協議会(有機農業推進法制定・各地の先進事例についての研修) など

### ○連携機関

山形県有機農業者協議会、米沢地域有機農業推進協議会(推進体制・計画についての協議)

## 3. 周辺等への影響力・普及力

### (1)創造性・地域的な影響力

日本の食文化の基である発酵食品の原料の生産を拡大し、地域の農家や消費者に伝えるため、以下の取り組みを行っている。

- ・稲・麦・大豆の2年3作による抑草対策
- ・米沢市有機農業推進協議会の中心メンバーとして、研究会以外の有機農業実践者や消費者との交流拡大により、有機農業の普及を推進。(栽培技術研修会、産業まつり出店など)

### (2)消費者等との交流、食農教育・環境教育への参画等を通じた消費者等の有機農業に対する理解と関心を増進する活動の実践

昔から付き合いのある個人ごとのお客様を大切にしながら、有機農業対して理解が深い会社や団体、消費者などへ積極的な販売・交流促進を行い、人と人との繋がりを大切にしながら販路拡大を進めている。

また、生産者と消費者の相互信頼を深めるため、首都圏の消費者との交流や子どもたちへの食農教育・環境教育などにも力を入れ、消費者等の有機農業に対する理解と関心を高めるため、取引先や地域のイベントに積極的に参加する等の活動にも精力的に取り組んでいる。

#### 【参加例】

- ・消費者団体「ぐりん・ぴ〜す」主催の秋祭りに参加。会場の西東京市の公園で出店、臼杵を持ち込み、餅つき、米販売などでPR
- ・米沢市主催の「産業まつり」に出店し、有機つや姫の販売・PR
- ・山形県有機農業者協議会主催の「やまがたオーガニックフェスタ」での販売・PR
- ・多彩な団体と連携して、田んぼいきもの調査を実施



### (3)地域の農業資源の保全と活性化への取組の実践

#### (4) 実需者等との連携を通じた地場農産物の利用拡大、安全・安心への取組の実践

「安全安心」と「食味」が両立することを示すために各コンテストに出品、結果は以下のとおり。

- ・ 全国米・食味分析鑑定コンクール  
2002年から10大会出品、受賞数18点
- ・ お米日本一コンテスト in しずおか  
2007年から6大会出品5点入賞
- ・ あなたが選ぶ日本一おいしいお米コンテスト  
2007年から2012年に4点入賞
- ・ その他の大会  
2011年米-1グランプリ in らんこしで2点入賞



#### 5. 取組の成果と展望

10年以上にわたるこれまでの活動により、有機栽培を中心とする環境保全型農業での一般的な栽培技術は確立してきている。また、米の消費減退や長引く経済不況で米の販売が厳しい環境にあるものの、人と人との繋がりを大切にした販売戦略で販路もしっかり確保できている。

有機農業は技術的なハードルが高く、新規会員が集まりにくいものの、現在は、設立当初からの会員を主体とした10名の会員が、がっちりとしたスクラムを組んで研究会の活動を行っており、これからも変わることなく、本来あるべき「農業」と「食べ方」・「暮らし方」を求め、次の世代に繋げていくような取組みを進めて行きたいと考えている。

今後は、栽培技術のマニュアル化などにより、個人の技術レベルの更なる向上を図りながら、新たな参入者の確保、取組みが進んでいない野菜栽培の取り組み拡大、頭打ちの価格に対応したコスト縮減による所得の確保などに力を入れ、研究会の目的達成に向けた取組みの進展を図っていきたいと考えている。